あとがき

「維新」と「伝統」をめぐって

企画・編集委員　松　本　久　史

今号は「維新と伝統」というテーマを設定して編集した。本年は明治維新百四十年にあたることもあり、いわば「維新」を緯糸に、「伝統」を経糸として、近代以降の日本の実像を織り上げていきたいという意図がそこにはあった。そもそも、「神武創業」を掲げて明治維新が遂行されたこと自体、大変革のなかに「伝統」が含意されていたとも考えることができよう。敢えて忖度すれば、加藤玄智博士によって本学会が創立されて以来、「維新」と「伝統」は通底するテーマのひとつであるといっても過言ではないだろう。

本学会が再発足して二十年。その間、日本および世界は大きく変動している。世界観を構成するイデオロギーの揺らぎ、グローバルなモノや情報の展開、頻発する民族・宗教紛争やテロリズムなど、私たちは新しい「戦後」を生きているともいえよう。その中で、維新以後の近代日本の歩みの中で、あらためて「伝統」について考察することを求められているのではないか。

全体の構成として、まずは論文をおおよそ時代順に三区分した。Ⅰは近世から明治にかけて、Ⅱは明治時代および明治天皇、Ⅲは大正・昭和期に及ぶ論考であり、まさに明治維新を起点とする「伝統」の捉え直しや継承の諸相を通覧することができる。さらに、年二回開催される例会、および本年六月に開催された講演会・討論の記録を掲載している。これら例会・講演会についても紀要のテーマに沿って企画・立案されたものである。また、随想や書評・紹介等においても、テーマと深く関連した考察が随所にみられ、連載の『明治孝節録』翻刻も含め、是非、本編の諸論文と併せて熟読されたい。なお、学界においては、近年、国民国家形成における「伝統の創造」がややセンセーショナルに取り扱われてブームの観を呈していたが、冷静な事象分析・考察が必要なことを、これら論考等から教えられることが多かったことも付記したい。

平成十八年の復刊四十三号以来、年一回刊行という形での発行は三号目になる。幸い、過去の二号ともに好評をいただいている。今号も五百ページを超えるボリュームとなったが、それに相応しい重厚な論考が展開されていることを実感いただければ幸甚である。編集に携わる者として、次号以降も関係諸賢のご協力を仰ぎ、学界に裨益する紀要の編集に努めていきたいと思う。最後に、玉稿を賜った先生方に改めて感謝申上げる次第である。

（國學院大學研究開発推進機構講師）